

## ドン・ジュアンに観るバイロン像(4)

楠 本 哲 夫

既述（前号）の如く Don Juan 第一編の最後では、専ら <sup>もつぱ</sup>美しい姦通の條りに終始している。ここで Don Juan の物語のすじがき——つまり19世紀の最もよみ易い、たのしい長篇であるこの詩が、そのストーリー展開ではなく、その充実性、豊富な内容において、楽しむに値するものであることに言及したい。

珍奇さという面で ジュアン とジュリアの情事は 中世の劇 El Atheisla Falminato, 17世紀 初期の Gabriel Tellez の El Barlador de Sevilla y Combidado de Piedra, Moriere の Don Juan: ou, Le Festin のオペラの中で既に開拓されている古い伝説に基くプロットについて当然 <sup>(or)</sup>期待できるものを この作品は追求してゆくのである。

しかし Byron 詩の場合 ある顕著な相違が 冒頭より 明白となっている。主人公としての ジュアンは一人の陽気な、戯れの恋の奴でもないし、官能的肉欲的 恋の奴隷、耽溺者でもないのである。若きジュアンは、か弱き、もろき女性の開拓者であるどころか むしろ 彼の行途をよぎった <sup>ゆくて</sup>種々様々の女性群の犠牲者だったのである。

ジュアンを誘惑し そそのかしたのは、ジュリアだったのである。16才でジュアンは性に目覚め ジュリアのジュアンへの慕りゆく魅力、ジュリアのジュアンへの良心の葛藤、そして最後の 降伏、落城——これらすべてが

たくみに 活々と鮮明に描かれてゆき、そして最終的シーンは ドン・アルフォンゾがジュリアの寢室に闖入してゆくのであるが、そのとき ジュアンがその場に居合わせたことが露見するのである。それが豊かに コミック風なものとして描かれている。しかし諷刺的 アンダートーンが、終始 流れている。

ジュアンは犠牲者であったのみならず、軽視された犠牲者だったので、特に、ジュリアのメイド、アントニアの、あの、粗雑な常識からすれば まことに軽蔑されて然るべき、犠牲者だったのである。

アントニアの観たところでは、ジュアンは‘この可愛い紳士’、‘<sup>いたずら</sup>悪戯っ子’、であり、彼の‘半ば少女っぽい顔つき’は、——ジュリアの夫、ドン・アルフォンゾがジュリアの寢室に<sup>ちん</sup>闖入したとき——そのことで、生命をおとすほど、いや、その隠れ場所を、失うほどの、それほど、たいしたものではなかったのである。つまり、アルフォンゾがジュリアの寢室を急襲したとき、ジュアンの隠れ場所は ジュリアのベッドそのものであったので、そこでジュアンは、ジュリアとアントニアの下で 一個の密輸品のように横たわっていたのである。アントニアの眼には少なくとも、ただ、ささいな<sup>いたずら</sup>悪戯ごとぐらいにしか映らなかった。あのような、大事を、決闘事を惹き起こそうとは、そしてジュアン追放の憂目に遭う、そんな悲運を負うなんて夢想だにしなかったことであつた。それは、悲劇というよりも むしろ、一過した喜劇として 少なくとも アントニアの眼には観じられた どんでん返し、茶番劇にすぎなかったのだが…………

いかにも ドン・ジュアンは 彼の行途を一過した多くの女性群の犠牲者だった。彼がそうあるべく教育したのは 最も教育に熱心だった、そして愛児に絶対な期待をかけた母イネスなのであり、そのイネスの期待が裏目に出たのであろう、転落の詩集を繰り展げ綴りゆくことは、いつの世も、<sup>いたずら</sup>悪戯ずきの神の仕業である。

そして、このときの、この<sup>くだ</sup>條りの、バイロンによるジュアンの描写には ふんぷんとして、バイロン自身の育い立ちし幼少期の、甘い、ほろ苦い、とんでもない、祕言が、<sup>にお</sup>臭ってくるのであり、バイロンの脳裏に突如として、閃き蘇えてきたことは明白である。春画を見る如く色あざやかに蘇えたもの、その<sup>ひめごと</sup>祕言を Byronic mystery としてバイロンは絶対に口外しないと心に誓ったことであり、そして 事実 生涯口にしなかったものを、このような形で<sup>たくみ</sup>巧みに描写し脚色したのである。まことにアイロニカルに、コミカルに。

その祕言とは ——バイロンがメイドのメリー・グレーと育い立った幼少期の祕言である。彼女は スコットランド人でバイロンの嬰兒期から1799年の終り（バイロン11才）、即ち、バイロンの生涯の中で幼少期12年間をバイロンと共に暮し、乳母として彼を育てた。バイロンの母キャサリンの、あのケルトの女としての癪性の激しいヒステリックな性格を考えると、この乳母、兼<sup>オース</sup>メイドの メリー・グレーが、その養育を託された幼児バイロンから、ある意味で相当に慕われたことは 当然と考えられてよいであろう。彼女は迷信的カルヴィン主義者であり、又 生れながらの放蕩性を兼ね備えた女であった。バイロンの母の留守中、顧問弁護士のハンソンが訪れたとき、このメイドと少年バイロンとの間に、当時存在した<sup>どうてん</sup>驚くべき関係について動揺し 彼女をただちに解雇するようバイロン未亡人に書き送って その結末としてバイロンはハンソン一家にひきとられ ロンドンへと移り住むことになったのである。

そのときのハンソンの手紙は——

「……………彼女は誰彼かまわず、最下等の者たちを御子息の部屋に連れこみ少年バイロンとベッドに飛びこみ、駈者との情事をより楽しむ。夜は外出する。駈者たちを引連れて、馬車に乗り込み、いっしょに、いかがわしい酒場を軒並みに飲み歩くといった仕末です。……………」 と メイ・グレーの行状を詳しく報じている。

バイロンはこのときの思出を、死後、妻アナベラ、親友たちの立合のもとに、

ホブハウスの強い主張もあって、マレーの家で焼却された未公開日記の中で、次の如く述べている。

「私の情熱は 非常に幼い頃 目ざめた。」と記している。この破戒の女、メイ・グレーが少年バイロンに与えた決定的感化、影響がバイロンの生涯の心の鬱積、憂愁のルーツであり暗いものとして、<sup>かげ</sup>翳りとして止り続けるのである。そして更に注目すべきは、彼が、祖先より伝承したドス黒い悪血と共に固りゆき、この時期、すでに バイロンの対女性観は確立されてしまうのである。

バイロンの対女性観——それは、メリー・チャウオースへの失恋事件によって、決定的なものとして生涯の対女性として確立されたのであるが、バイロンにとって女性とは、瞬時もなくてはならぬ存在であり、彼の‘風見鶏’の如く、荒れ狂い、揺れ動く心の激しい揺らぎの中であって、無風状態の瞬間の‘止まり木’であり、‘憩いの場’なのであり、バイロンにとって 女性とは、‘水と魚’ の関係なのであった。バイロンにとって 愛は哀であり、‘永遠の愛’はあり得ないのであった。だが、しかし、女性は‘憩うべき、止まり木’として、なくては 叶わぬ、必要な存在だったのである。

《ドン・ジュアン》のこの條りで、母キャサリン、イネス、ジュリア、そのメイド、アントニア、バイロン自身のイメージを、コミカルに、諷刺的にオーバーラップさせながら 脚色してゆくのである。

He had been hid—I don't pretend to say

How, nor can I indeed describe the where—

Young, slender, and packed easily he lay,

No doubt, in little compass, round or square;

But pity him I neither must nor may

His suffocation by that pretty pair.

(I, clxvi)

ジュアンは隠れていた      どのように、どこにと  
 私が述べる勇氣は      ともないが  
 若く華奢な身を無造作に      丸か四角にバックされ  
 きつと縮こまって      寝ていたのだ。  
 二人の女にはさまれて      窒息しかけていても  
 彼に同情は禁物      できもしないわけさ

〔 1 篇166〕

このときのジュアンが、意識を失い、そして、思慮分別をなくするという、  
 <二重の窒息>こそ、この詩の全体の流れ、展界の中で ジュアンがその身を  
 曝されることに成りゆくことへの二元性の強調、力説を意味し関連づけようと  
 しているのである。

ジュアンは、然るべく 誰かと争わねばならぬ立場におかれるとき いつも  
 彼は相手から出し抜かれることになりゆくのである。

ドン・ジュアンは、多くの他の情事の中でもとりわけ、<かかる中間状態の  
 地峡>において Pascal の、そして Pope のシナリオの劇的上演をはたす男な  
 のである、そしてそれは——彼が 暗き英知と 粗き偉大さを身につけてい  
 る限りにおいてのみならず、その暗き英知が、<情熱と決断>という、葛藤し、  
 相争う要求によって 更に、あいまいにされるという意味において。

この、初頭のベッドルームのシーンは、ジュアンの<自由志向>への、無益  
 な、一挙手、一頭足のもがきにおいて示す 一つの袋小路から他の袋小路へと  
 模索しつつ進む、一つの完全な見本なのである。

ジュアンの<最初の隠れ場所のベッド>からふとんで簀巻きにされて<第二  
 の隠れ場所の押込み>の中へと投げこまれる。 彼の置かれた立場は 終始一  
 貫して 全く不名誉なもので屈辱的である。

I want a hero (li)

＜ヒーローが決まらぬので困るんだ＞

このように バイロンは＜ドン・ジュアン＞の詩を書き出している。もしこの詩の最初の節を読むにあたって ‘want’ の意味を ＜望む＞の意味にとるとすれば、今、振返ってみると、むしろ この語を ＜欠乏する＞、＜こと缺く＞、＜思い浮かばぬ＞の意味にとったほうがよいのだろう。つまりバイロンが 付与する意図をもたぬ lack ＜空白、欠乏＞の意味である とわかるだろう。

2 節から 5 節において バイロンは 嘲笑的、ミルトンの、英雄の登録名簿を＜<sup>おつてがき</sup>追而書＞（添え書）を添えて 差し出している。

I condemn none,  
But can't find any in the present age  
Fit for my poem (that is, for my new one);<sup>23</sup>  
So, as I said I'll take my friend Don Juan. (I, v)

…………誰に文句を言うのではないが  
今の時代に見廻しても僕の唄にうってつけの  
（つまり、僕の新しい詩にピッタリの）誰一人見つからぬ  
そこで先刻のべたように 馴染みのドン・ジュアン君を  
かっ  
擔ぎだそう

（第一篇五節）

バイロンがここで述べんとしたことは、19世紀は英雄<sup>ヒーロー</sup>空白時代である ということだ。まあ、そうだと考えておこう。 そうだと考えるとして、我々は自

問自答してみよう。結局、英雄時代なるものが、そもそも、今迄に存在したのであろうか、どうかを。基本的人間の條件は 人間が英雄たることを禁じているのではないか どうかを。——もっとも、美的観点、或いは、愛の観点、或いは、究極の意義から現に英雄を崇め祀っているのではあるが。

問題は、肝要な決め手は Johnson の英雄主義であり、＜The Vanity of Human Wishes＞、＜The Rambler＞そして＜Rasselas＞の中に述べられている。

ジュアンの身に纏っていた、たった一枚の衣も アルフォンゾとの取組み合いで ずたずたに裂かれ ジュアンは丸裸で 闇の中を母イネスの家へと逃げ帰り、後には 混乱と災難をのこしてゆくのであった。

その後日談は、——バイロンはこれを稲妻の如く、立板に水の如く、矢継ぎ早やにまくし立て述べ、一過しているのであるが——罵り、雑言をまくしたて言いふらす、英国的、姦しく無意味 な、小雀のさえずり、馬鹿騒ぎとして語り、例の如く、チクリと あてこすり、小突き、諷刺して、

The pleasant scandal which arose next day,  
The nine days' wonder which was brought to light,  
And how Alfonso sued for a divorce,  
Were in the English newspapers, of course. (I, clxxxviii)

翌日湧き起こった	いとも愉快なスキャンダルと
明るみに出た	90日間の噂話と
アルフォンゾが	離婚訴訟を提起した次第が
むろんのこと	英国の新聞を賑わした。

と唄い、ジュリアが女子修道院に入り、 ジュアンは 親しい婦人達のアドバ

イスで、船に積みこまれて、海外へ追放されたという結末で結んでいる（第1篇190）。

そして ジュリアが女子修道院の一室から書き送った、あの有名な手紙は（当代の批評家 Colton は、‘その様式が Eloisa の、人口に膾炙した書簡に全く類似している’のを認めているが）、曖昧 模糊として不明瞭な二面性を示すものである。

バイロンの詩行の中で最もしばしば引用されたもののの中に数えられている次の詩行がある。

Mon's love is of man's life a thing apart,  
Tis woman's whole existence... (cxciv)

男にとって愛は 生命<sup>いのち</sup>から切離された一部  
だが女にとって 愛は生命<sup>いのち</sup>のすべてである

そしてこの引用句は、あわれな女への同情的な溜め息と共に 通常 述べられている。

ドン・ジュアンのコンテクストの中で かかる妄執は 文明化した世紀を通じて営々として築き上げられた男性的、合理的、諸々の価値の構築、建造の全てに対する吸血鬼——夜間 人の血を吸う死霊——的脅威、威嚇として顕れてくる。

それは Blake が the Symbolic Book の中で Slogus という名を与えた 好色多情に つき纏<sup>まと</sup>ふ性的、肉欲的家系の湿地帯<sup>しつち</sup>なのである。

You will proceed in pleasure, and in pride,



Beloved and loving many; ...

(I, cxcv)

快樂と誇にみち 貴男は進み行くでしょう  
多くの女に愛され 愛しながら

(I, cxcv)

二度目を、いや、二十回目を、繰返し愛読する読者にむかって ジュアンは微妙な、劇的な諷刺を投げかけつつ進んでゆく。

‘My heart is feminine, nor can forget —

To all, except one image, madly blind,

(I, cxcvi)

私の心は女ですもの 忘れることはできません  
狂おしく<sup>めしい</sup>盲て何も見えぬ 只一つ貴男の<sup>おもかげ</sup> 倅 しか

Storge の吸血鬼の本質を構成しているのは、＜この狂気＞、＜この盲目＞である。

Eliot の これと対照的文句、

‘Love is itself unmoving,

Only the cause and end of movement,

Timeless, and undesiring’

愛は本質的に 不動である  
ただ 動きの 因果あるのみ  
それは時を超え ままならぬもの

は、私達を この Turkish Tales へのエスト（精神、気品）へと呼び戻すのである。

バイロンの対女性観のルーツは探るならば、英国最古のブルン家の、そして母方、スコットランドのゴードン家の祖先の血の中に流れる名門の貴族出身であることへの 異常なまでの誇りと共に、幾多のブラック シープを輩出したという不名誉なドス黒い血をも 承け継いだことなのである。その悩み、悶えゆえに、バイロンは荒れ狂う心の揺らぎを＜止まり木＞をもとめて、女性の胸に憩うのである。そこに バイロンの場合、女性遍歴は いつの場合も愛は哀だったのである。

更に特記すべきは（既述の如く） バイロンは あまりにも早い幼児期に乳母、兼、メイドの メイ・グレーによって 彼女の導きによって ‘性の目醒め’を知ったのである。それは＜暗いもの＞として 生涯 バイロンを苦しめ 心の内奥に鬱血するのである。

それは、やがて ハロー入学時前後の少年期、幾度となく、淡い恋を経験し、又、片思いに終る、満ち足りぬ恋を知り、最後に メリー、チョワース——年上の、そして、バイロン家とは宿敵の間柄にある隣家の貴族の娘——を、理想の女性として慕い、できうるならば妻としたいとまで焦がれながらも、全く一方的、自分の片思いにすぎなかったことを知ったときの、鉄槌の頭上に打ち下された如く、傷ついた、失恋の深い吐息は、ハロー校を休学したほどの大きな傷痕をのこした。

負けん気の強い少年バイロンは、そのとき、はっきりと決意した。

＜よし／ 俺は征服してみせる／ 全世界の美しい女性を 俺の膝下に きっ  
と 脆 <sup>ひざまず</sup> かせてみせる／＞

バイロンの対女性観の決定的ルーツはここにあり、既にこの時、確立されてしまったのだ。そう心に誓ったのである。

＜呪われた血＞のバイロンは 己が心の揺らぎを 自分の心を——ギリシャの美しい青年 <sup>ナルキッソス</sup> Narcissus が自分の姿を水鏡に映し観た如くに——生涯を通じて変ることなく慕い続けた只一人の姉オーガスタに くっきりと映して観ることが 心に懸けた一大悲願だったのである。＜<sup>追放</sup> Exile＞によって 最も大いなる、最も高き、最も清らかな女性、オーガスタと <sup>なまき</sup> 生木を裂かれる如く 引き離された そのバイロンの心の哀感 <sup>ベッソス</sup> をいや <sup>どうもく</sup> 慟哭を、かみしめながら、流滴の地に おいて＜姉、オーガスタに寄せる歌＞の数々をかき、＜マンフレッド＞をかき、その他の多くの詩の中の、この＜血に呪われた詩人＞の心境を、我々はさすがに <sup>うべな</sup> 肯うことができるのである。

バイロンが このドン・ジュアンを書き始めたころ、心は 最も揺れに揺れ 荒れ狂っていた。自らの生涯の黄昏（たそがれ）を感じ始めたゆえに最高に複雑だった。時にバイロン30才、みずから、うら若き美しいグィチョーリ伯爵夫人テレザの＜<sup>キヤバリエール、セルベンテ</sup> 随 身 の 騎 士＞の身分であった。＜滴滴の樂園＞にあって、富もあり名誉もあり、地位もあり、人望も集めていた。しかし 心に空<sup>から</sup>っ風は吹きまわっていた。バイロンは 自虐した。みずからの心に鋭く 問いかけた。

俺は果して女を征服できたのか

女から俺が もてあそばれたのか

バイロンの心を鎮めるために 是が非でも＜ドン・ジュアン＞を明るみに出したかった。バイロンは答を出したかった。みずからに、そして、是が非でも世の人々に問いたかった。テレザは反対した、ボブハウスが反対した。マレーは身の危険を感じて、神をおそれぬ人をも世をも顧りみぬ、ある意味では

この極悪非道の作品〈ドン・ジュアン〉の誕生を、出版を、拒否し続けた。

しかし、バイロンは 世界を敵としてでも〈ドン・ジュアン〉に 産ぶ声をあげさせたかった。

悪魔の力を借りてまでも。

〈ドン・ジュアン〉は 見事な バイロン自身の姿の、心の遍歴、そして女性遍歴の戯画化であった。絶妙な バイロン自身の対女性観への答えであり、バイロン自身の女性遍歴への患弄、揶揄、嘲笑的自画像であり、見事に描かれているが故に 読者の笑い、そして <sup>カリカチュ</sup>paradoxically <sup>パラドクシカリ</sup>に哀感をそそのめるのである。特に、第一篇、〈姦通の場<sup>シーン</sup>〉で、悪魔の力を借りてまで、バイロンの訴えんとした詩情がかえってユーモラスに、豊かにおおらかに伝はってくるのを覚える。

(続次号へ)

#### 参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron: Vewis Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty: Byron.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye and Keygan Paul.